奨励

きずなを完成させよう

奨励	原 誠〔はら・まこと〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター所長 同志社大学神学部教授
研究テーマ	日本とアジアのプロテスタント教会の歴史

これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。

（コロサイの信徒への手紙　３章14節）

はじめに

私が同志社大学神学研究科を修了して牧師となった、最初の教会の主任牧師の飯牧師は、説教のなかで時々、こんなことを言った。牧師が死んで天国に行くとき、天国の門の前で、牧師は留められて、入れるかどうか審査される。その時、私はダメだと門前払いされる。なぜか。牧師は高いところから、神の権威を背景に聖書の言葉を語り、人に愛を説き、そして負いきれない十字架を、聞く人びとに負わせてきた。牧師自身が自分で語ったその言葉に対してどのように生きてきたか、口で話したことをどのように牧師自身が生きてきたか、それが問われるというのだ。

その牧師は説教のなかで、俺には舌が２枚あって、ということを冗談で言っていた。

私は、その牧師は確実に神のもとで天国に入ったと確信しているが、そのジョークは、私にとって鋭く心のなかに刺さってくる言葉でもあった。以来、今に至るまで、語る言葉の内容、方法にもよるが、私の頭を離れたことはない。

語ることは、具体的にはどういうことなのか。いつも私は自分が語ることについても、私自身が問われながら語らなければならないと、心してきたつもりだ。私にとっては信仰ということ、神学ということについても同様だ。

春学期の統一テーマが、「愛は、すべてを完成させるきずなです」（コロサイの信徒への手紙３章14節）であったため、４月以来、チャペル・アワーに継続して出席された方は、このテーマを何度も読み、聞く機会があっただろう。また広くマスメディアを通して、多くのことを知らされ、今もなおその只中にいることを知らされる。いうまでもなくこのテーマは、昨年の３月11日以後に問われてきたからだ。今日もまた、このテーマ、主題を念頭に置きながら、いくつかのことを確認しながら、私はあえて「完成させよう」という、いわば動詞、能動形、あるいは課題について、そして具体的にはどういうことなのか、私にとっての事柄として一緒に考えてみたい。

フクシマとオキナワ

今、「愛」・「きずな」の意味を考えながら、ブームのように使われるこの言葉、そして地震・津波・原子力発電所の事故からのこの１年を考えてみるとき、文字どおり、言葉の正確な意味と深みと重みを含めて、生命・家族・暮らし・仕事・ふるさと・仲間、これらの日常が、根底が破壊されたことを思わないわけにはいかない。しかも、それが予告なしの、準備なしの一瞬に起こった、その時であった。もちろん事故のことについて事故後の対応などについてあれこれの検証をすることは決定的に大切だ。

しかし今、それは再建ということなのか、つまり、われわれが求めるのは「元どおり」になることなのか。３月11日以前の３月10日のような日常を再現することなのか。

今、明らかになったことは、人間がつくり出したものを、究極的には人間がコントロールできないということ、つまり再現できないのではないか、という点だ。ここで細かく論ずる時間はないが、第一次世界大戦で人類は当時の最先端の科学技術を用いて大量破壊兵器、殺戮兵器である戦車・潜水艦・毒ガスを開発し、おびただしい市民・非戦闘員の生命を奪った。第二次世界大戦のときには、同様に原子力を人類は手にした。人類は、開発した技術を最初に兵器として用いてきた。そして、これまでの歴史的教訓がありながら、それに誠実に向き合ってこなかったことが、一瞬のうちに明らかになった。科学技術の発展は、諸刃の剣だということだ。人間の理性、知識、科学技術に両面があるということを認識することだ。

関西電力でも原子力発電が再開され、また節電が求められる日常だ。最も電力を使う東京、首都圏、そして関西の地域でも、節電と言いながらしかし、電力を使う日常が継続されている。これまで電力を一方的に提供してきてそれが崩壊したフクシマと、一方的に電力を利用してきた東京との、この現実、構造が、一瞬のうちに明らかになった。フクシマに起きたことはフクシマの原発が問題ではなく、東京を始めとした、都市に住み、大量の電力を消費する、われわれの問題なのだ、ということだ。

今、「一瞬」という言葉を何度か使った。しかし他方、一瞬ではなく、長い時間の継続と日常のなかで、同じ水準ではないにしても、基本的構造が同じで継続している場所がある。オキナワだ。今年、１９７２年の本土返還から40周年。これも話し始めたら（授業のなかではできるだけ丁寧に語っているが）時間がない。沖縄戦のことなども含めて、今、多くの言葉は使わない。ただ言えることは「オキナワ問題」という言い方をやめることによって見えてくることがある。

オキナワに問題があったのではなく、本土のわれわれの矛盾が、オキナワに凝縮され、顕在化している、ということだ。

一瞬のフクシマと、長い時間をかけて生じている現在の日常のオキナワに向き合いながら、私はどこに立ち、どこを向き、進もうとするか、その本質は何か、ということこそが問われている。フクシマとオキナワは同じだ。そして、私は、あなたは。

どちらを見るか、上を向くか、下を向くか、一歩、歩き始める方向は、そして私の「舌」は。

優先順位の組み変え

「きずなを完成させよう」という表題にした。根本は、先ほど言葉の意味について話したように、私が大切にされているか、同様に他者も大切にしているか、されているか、「きずな」をもっているか、確立しているか、作ろうとしているか、それは思いだけか、口先だけか。具体的な行動によるものか。

結論として言えば、事柄の優先順位の組み換えということに尽きると思う。大学で学んでいるわれわれは、知識を増やし、経験を積み、見聞を広げる。それは、大切なことだ。そのこと自体は否定しないが、根本的には、何が最も大切なことなのか、その優先順位を知ること、私のなかに刻み込むこと、自分のなかで明確にされていくこと、そして初めの一歩は、どちらの方向へか。

昨年２０１１年２月６日、私は学部のゼミの学生と一緒に沖縄に行った。東日本大震災の１カ月ほど前だ。韓国からの交換留学の学生がいた。また、重度の障がいをもち、車椅子でなければ移動できない女子学生がいた。その障がいをもつ学生の出身は東京だ。東京の大学に進学しようとしたが、バリアフリーの設備がない。つまりハード面で受け入れることができないということで同志社に来た。同志社はこの面でいえば全国トップスリーにランクインするハード面とシステムをもっている。彼女は母親と一緒に４年間、同志社で生活し、父親は単身で東京にとどまった。彼女が過ごした高校はキリスト教主義の学校だったが、そこでのキリスト教理解は、これこそが唯一絶対の真理であり、価値だという教えを一貫させていたという。しかし、同志社の神学部ではそうではなく、自由に批判をしながら、相互に検証していくその自由さにびっくりしたと言っていたことを思い出す。彼女は行動に制約があったために、京都で生活しながらもその行動は極めて限られたものだった。地下鉄は乗れるがバスは無理だったからだ。

私たちは彼女とともに沖縄に行った。車椅子で飛行機に乗ること、移動するリフト付きのレンタカー、バリアフリーの宿泊施設、そして障がい者用トイレがあるかどうか、また本人の水分の摂取量の制約など、短い３泊４日の旅であったが、この学生にとっても、またいわゆる健常者の学生自身にとっても、ともにこの短い旅のなかで、しかもオキナワという場所によって、どんなに多くのことを体験させられたか、言葉に表すのが困難なほどだった。彼女が唯一、私たちと同一の行動ができなかったのは、地下の濠・ガマに入ることだけだった。ともに行動することで、食事することで、ともに体験を分かち合うことで、しかも沖縄の歴史や現在を知ることを通して、私たちは確かに、事柄の優先順位の組み換えということの意味を知った。

先に紹介したように、同志社大学は日本に数ある大学のなかで、トップスリーにランクされるハード、システムが完備されている。残念ながらこのクラーク記念館はバリアフリーではないが。これらは、いわば目に見えるハードの部分だ。そして同様にシステムも、これらのことについて予算をつけていくということは必要なことだ。その上でなによりも最も大切なのは、ソフト、つまり人間の心が、これを推進する。信仰・希望・愛、もっとも大切なのは愛、だ。

完成させるきずな

「きずなを完成させよう」と題に掲げた。きずなについての解説、原発についての解説、オキナワについての解説、フクシマについての解説、そして知識、理解を深めること。そして「愛」について語ること、説明すること、解説すること。それぞれに大切である。しかし、知識が増えれば幸せになるかというと決定的にＮＯだ。

そして私の生きているこの現実のなかで、一歩を歩き始める。私は、できるだけ１枚の舌で生きていきたい。私たちは、いつも現実のなかで応用問題として問われ、そしてそれに対して、精一杯の応え、responseをしたい。それがresponsibilityであり、私の応答としての、自分で主体的に担っていこうとする義務、他者から要求されて行動するのではない、そのような「きずな」を、神から与えられているのだから。

あなたは、そして私たちは、どうだろう。

２０１２年７月17日　今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録